

地球は宝物でいっぱい

静岡市内小学校

藤本さん

かんきょうを良くするにはどうしたら良いだろう。何か新しいことを始める事が必要なのかな、それとも何かをやめる事が必要なのかな。

そんな風に思いながら私は、藤枝市瀬戸谷でじゅんかんがた農業をしている農家の手伝いに行った。ここでは無農薬でお米を作り、田んぼにはアイガモが放されていた。アイガモは田んぼに生えるざっ草や害虫をエサにして元気にスイスイ泳いでいた。農家がいやがるざっ草や害虫も、アイガモのごちそうだ。農家がかっているニワトリは広い小屋を自由に走り回り楽しそうにくらしていた。ニワトリのエサは、周りの農家から出た野菜のくずゴミや私がぬいた道ばたのざっ草、不ぞろいないねなどだった。ゴミがゴミではなくなりニワトリの大切なごちそうになっていた。そのためごはんを食べると、なんだかたくさんの自然がまざった味がした。

その時私は気付いた。かんきょうを良くするには、新しい事を始めるのではなく、「今ある物を使って、新しい何かへとじゅんかんさせ

る事」が大切だという事に。私たちがゴミと思っている物でも、きちんとじゅんかんさせれば、それはだれかの宝物になる。私たち人間がこの地球上の物を上手にじゅんかんさせれば、もっとこの宝物は増えるかもしれない。

私が大人になったら、じゅんかんシステムを考えて自然と人間をむすびつける人になりたい。そのためには、まだまだこの地球上のたくさんのお話を知らなくてはいけない。学校の勉強もがんばろう！図書館でたくさん本を読もう！そしてまた農家の手伝いに行こう！きっとこの地球はたくさんのお宝物でいっぱいだ。

あなたの力で

浜松市内中学校

鈴木さん

私が住んでいる浜松市だけで、スーパーマーケットは、百件以上ある。スーパーマーケットに行けば、魚や肉など消費期限が短い食品が多く売られている。食品が売られているのは、スーパーマーケットだけではない。コンビニエンスストア、ドラッグストア、百貨店、無人販売、自動販売機、それに外食産業や弁当屋さんなどを加えれば、一体どれだけの食品が売られているのだろうか。途方もないほどの食品たちは、全てが買われ、全てが消費されているのだろうか。

私の祖父母は、牧場を営んでいる。だから幼いころから牛が生まれる瞬間を何度も目にして、見るたび涙が出るほど感動した。練習を重ね、乳搾り体験をした。その日に飲んだ牛乳は、言葉に表すことができないほどおいしかった。きっと、「命」を目の前にして、「命」をいただくことが、私の心や思いを変化させ、そして、味も変えたのだ。私は、命を目の前にして生きてきたので普段から食べ物を残したことがない。私には、それが、当たり前だった。しかし、社会ではそれが、当たり前ではなかった。

世界中では、大量の食品がはいきされている。家庭系食品だけでも、十三億トンだ。国民一人あたりに換算すると、毎日お茶わん一杯分の食料を捨てていることになる。食品ロスには、過剰除去、直接廃棄、食べ残しの三つがある。事業系で、食品ロス量約二百七十九万トン。家庭では、約二百四十四万トンにもなる。これをみると、食品廃棄の約半分は家庭からということが分かる。

私は、ある記事を見た。それは、まだ安全に食べられる食品を、提供するスマートフォンアプリだ。東京のとあるホテルで、これを、導入し、朝食ビュッフェで残った食品を出品し、五十パーセント削減することができたと、記事を見て、分かった。

ほかに、こんなも例がある。私たちの身近にあるコンビニの例だ。人に優しい、地球に優しいコンビニがある。そのコンビニでは、お買い物かごにリサイクルされたペットボトルのキャップを使用したり、CO2排出量を削減するために、冷凍、冷蔵ケースには、扉を設置したりと食品ロスやプラスチックごみを減らすための工夫がたくさん行われているコンビニだ。

自分の目で確かめてみたくなり、実際に近所のコンビニへ行ってみた。そこには、手前どりという食品を手前のものからと呼びかけをしたり、賞味期限のちかい食品をもとの値段よりも少し安くしたりと食

品ロスをなくすための対策が行われていた。これは、ある年のクリスマスの日のことだ。私は、家族みんなで夜にコンビニへ行った。すると、店員さんから、「ケーキを割引きするので買ってください。」と突然言われ、まだまだケーキは残っており、その全てのケーキは、捨てられてしまっているのだと思うと、とても心が痛くなった。その数年後、クリスマスの日にはコンビニへ行ってみた。予約制の販売がほとんどで、当日販売のケーキやチキンは、数が限られていた。店員さんから割引販売をすすめられることもなかった。たった数年の間で大きく変化したのだろうか。余った食品を捨てるのは、生産者にとっても、環境にとっても、よくないことだ。私は、この変化を大いに歓迎したい。

だが一方で、事業系で企業努力を重ね、食品ロスがゼロになったとしても、食品ロス自体はなくなるならない。なぜなら、家庭系が食品ロスの半分を占めているからだ。

私は、今日外食をした。初めて、ネパールのカレーを食べた。ナンがとても大きくて、食べ切れなかった。ナンが、こんなに大きいとは思わず、注文してしまった。店員さんからテイクアウトするかすすめられ、包んでもらった。

私が、この作文に取り組みなければ、日常よくある「食べきれない」

に、こんなに深く考えをめぐらせることはなかっただろう。

その後、私はすぐ母に連絡し、夕飯がいらないと伝えた。包んでもらったナンを夕飯でおいしくいただいた。外食での食品ロスと家庭での食品ロスを防いだのだ。

こういう小さなことで、中学生の私でも食品ロスを減らすことができる。今日学んだことは、特に、海外の料理を注文する時は、異文化を勉強すること。料理の量や内容が分かれば、注文する時に、オーダーを調整できる。

これからも、一回一回の食事を大切に、今日みたいに学ぶことがあれば、それを活かして、食品ロスを減らしていきたい。

この作文に取り組んだおかげで、事業系の食品ロスに対しての企業努力も学べた。その企業努力をむだにしない消費者になりたい。

浜松市内小学校

竹内さん

わたしは、しょうがつこのちかくにある花だんのおせわをしている。きんじょにすんでいる、おじいちゃん二人とおばあちゃんとわたしとおとうとおかあさんの六人でやっている。

わたしたちは、花でつながっている。

いつもは花がさいているなえをつえていたけれど、さきおわたた花をかたづけ、みんなでそうだんして、こんかいはひまわりのたねをまいてみた。花だんぜんぶが、ひまわりになるよていだ。

たねからそだてるのは、わたしはじめてだったので、どんなふうにせいちょうするのかワクワクしていた。

つぎのひ、水やりにいくと、ジュースのペットボトルがすてられていた。たねをまいただけで、まだなにもさいていないけど、ここは、ゴミほこではない。このジュースもポイすてゴミに入んしんさせられて、かわいそうだ。ジュースも、花だんも、わたしたちも、みんなみなかわいそうだ。おばあちゃんはがっかりして、あまりはなさなくなってしまう。おかあさんは、おこっている。どうしよう、どうし

ようとおとうとはこまっている。おかあさんが、「かんばんをかいのみよう」といいたしたので、わたしがかいてみた。

たくさんのひまわりがさくといいなとおもったので、ひまわりばたけをかいてみた。

ゴミはちょっとへったけど、ゼロにはならない。

きょうはゼロだーきょうは二つあるーといながらまいにち水やりをしていたら、たねからめがでてきた。そうしたら、バッタやちょうちもきた。花とむしはつながっている。「なんの花がさくの？」ときいてくる人もきた。こんどは人もつながってきた。ゴミよりも花やむし、やさしい人がふえてきた。

あきらめないことがだいじだなとおもった。

ひまわりばだけがかんせいしたら、たねをとって、まだらいねんにみんなであえたい。つぎはもっと大きなかんばんをかくつもりだ。

未来への道

菊川市内小学校

新井さん

「袋はおつけしますか。」

何を言われているのか分からず、「はい」と答えた。

シートを見ると、袋三田と書いてあった。このことをきっかけに、レジ袋がなぜ有料なのかを調べてみることにした。

なんと、日本のプラスチック容器の廃棄量は世界二位である。この情報だけを見ると、レジ袋というゴミを減らすために有料化されていると感じるだろう。しかし、レジ袋をマイバックに変えたことで、減らせるプラスチックゴミの量は二%程度と、それだけで環境問題を解くことができるほどの効果は得られない。

環境省の調査では、レジ袋が有料化したことでマイバックを持ち歩くようになったと回答した人が五十一・九%、プラスチックごみ問題への関心が高まり、マイバックを進んで使うようになったと回答した人が七十五・一%いた。

つまり、レジ袋の有料化はゴミを減らすだけでなく、人々がプラスチックゴミの問題を意識することに、大きな役割を果たしていると言

える。実際、レジ袋が有料化した年のプラスチックゴミの量は前年と比べ三%削減していた。

このことをふまえ、私には何ができるのだろうと考えてみた。先ほどのビニール袋有料化の様に、直接的にゴミを減らすだけでなく、人々の意識を変える様なことは何かできないだろうか。

子供だからこそできることの一つが習慣化することだ。子供のうちからマイバックを持つ、水筒を持ち歩くということ徹底することで、将来的にはそれが当たり前の中になる。

もう一つは、大人に対するアピールだ。ポイ捨てが特に多いのは、車からの投げ捨てだと聞いたことがある。海岸でプラスチックゴミを拾うのもいいが、あえて道路沿いの道のゴミを拾ってみてはどうだろう。きっと子供達がゴミを拾っている姿を見た大人は、ポイ捨てをしにくくなるだろう。さらに、ゴミ拾いを経験した子供達は、ポイ捨てをしない大人になるだろう。

今まで人間は、自分達の生活を便利で豊かにするために様々な努力をしてきた。プラスチックもその一つだ。それを使ってきたことは悪いことではない。ただ、それが地球環境や人間の未来をおびやかすと知った今、今の自分が便利で楽をする道を選ぶのか、地球環境や人間以外の動物、そして私達の子孫を幸せにする未来に続く道を選ぶのか、

私達一人一人が考え、意識していく必要がある。

私は何年、何十年、何百年先の人達も笑顔でいられるそんな未来への道を選びたい。

当たり前前の行動で生き物を守る

藤枝市内小学校

藤村さん

「えっ！こんなものまで落ちてるの？」

夏休みにビーチクリーンをして、私は落ちていたごみにおどろきました。落ちていたのは、花火やおかしのごみだけでなくバーベキューで使ったトングやガスマッチ、コンテナの一部なども落ちていたからです。

「こんなものを捨てたら、えさとまちがえて食べてしまうかもしれない……。」

目の前に落ちているごみを見て、とても悲しい気持ちになりました。

私は今、授業でSDG^sについて学んでいます。その中で、「海の豊かさを守ろう」について調べています。特にびっくりしたのは、プラスチックごみが海に流れ込み、それらが細かい破片となって魚や鳥が食べてしまうということです。プラスチックをまちがえて食べてしまうと、それがどに詰まり死んでしまう魚や鳥もいるそうです。また、より小さいマイクロプラスチックごみは、非常に小さいので魚の体の中にどんどんためられていきます。そして、その魚を私たちが知

らない間に食べてしまい、私たちの体の中にもマイクロプラスチックが入ってしまいます。

私はこのことを知り、本当に海にごみが落ちているのが気になり、家族と一緒にビーチクリーンに行ってみることにしました。そして、思っていたより色々な種類のごみが落ちているにおどろきました。なぜ、「ポイ捨てはやめましょう」と言われているのに。ごみを捨てていってしまう人がいるのでしょうか。

ビーチクリーンをしていて感じたことは、ポイ捨てされていたごみの多くが石垣の間や草むらの中など人の目が見つからないところにわざとかくして置いてあったことです。悪いとわかっているのに置いて帰ってしまったのだと思います。また、花火のごみのほとんどが打ち上げ花火のごみで、夜に花火をやって打ち上げられた花火のかけらがどこに飛んでいったのかわからず、そのままにされてしまったのだと思います。

ごみを持ち帰りたくない、小さいごみだし少しくらいいいかなという自分勝手な気持ちが魚たちを苦しめているのだと思います。

「来た時よりも美しく」

この言葉は私の母がよく言う言葉です。そして当たり前前の行動だと思います。

この気持ちをみんなが持てば、少しずつですがポイ捨ては減っていくと思います。私も海だけでなく、公園や遊びに行った先で自分のゴミは持ち帰ると、少しでもゴミから離れたいという気持ちを思います。私にできることは小さくてもいいかなと思います、当分の前のごみや続けたいことなど、一匹でも多くの生き物を救ってみたいと思います。

私は提案します

裾野市内中学校

清水さん

私が小学五年生のとき、下校中に友達と、先生が帰りの会で話してくれたことが話題になりました。それは、ゴミのポイ捨てが原因で、海の生き物が被害にあったり、町や都市が汚れて悪臭がしているという内容でした。私たちが、「やっぱりポイ捨てはよくないよね。」と口々に言っていた、その目の前にペットボトルが落ちていました。そしてそのペットボトルを、大きなゴミ袋を持った人おばさんが拾って袋に入れていました。

私たちは顔を見合わせました。その日はいつもより早く下校できた日でもあり、また、帰りの会での先生の話も思い出され、私たちは少しの時間でしたが、おばさんのお手伝いをすることにしました。

ゴミを拾っていて気づいたことがありました。それは、ふだんから歩いている道で、見慣れている景色なのに、道はただでなく花壇や植え込みの中からもたくさん、いろいろな種類のゴミが出てきたことです。ペットボトル、お弁当のパックやビニール袋、置かしの袋や箱、紙類、中には家庭ゴミがそのまま投げ捨てられたのかと思うもの

までありました。先生の話はどこか遠くの町の話ではなく、とても身近なことだったので。いつも歩いている道にこんなにゴミが落ちていることがショックでした。今思えば、ふだん見慣れているからこそいつもの光景として見逃してしまっていたのでしょう。

次の日の朝、登校の時、昨日ゴミ拾いをした所が少しだけきれいに見えました。「やってよかったね。うれしい！」と友達と言いました。それから私たちは時々、通学路のゴミ拾いをするようになりました。するとどんどん周囲がきれいになって、登下校中に友達や下級生から、「ここらへん、前よりきれいになったよね」という声を聞くようになりました。一緒にゴミ拾いをした友達と、「やったね！やっぱりゴミ拾いで正解だったね。これからも続けたい！」と喜び合いました。

その後、学校でゴミ問題について学ぶ機会がありました。そのとき、町の中だけでなく、海や川にポイ捨てする人がいたり、町のゴミが川から海に流れていったりしていると改めて知りました。そのゴミを魚やカメ、クジラなどが食べ物と勘違いして食べ、死んでしまうということを知って、胸が痛くなりました。ポイ捨てをしてもゴミは消えて亡くなるわけではなく、どこかに流れていって悪い影響を及ぼします。しかも、捨てた本人ではなくて、海の生き物や環境に被害を与えてし

まつのです。私は怒りを覚えました。ポイ捨てした人は、自分のそばからゴミが消えてすっきりするのかもしれませんが、それは本当に自分勝手で、そのゴミがどこで何に被害を与えているのかも知らない、考えないのでしょ。

日本のゴミ総排出量は、年間約四千六百六十七万トン、これは東京ドームの約百五十個分だそうです。また、ポイ捨てされているゴミの種類で何が多いかというと、たばこの吸い殻、空き缶、紙コップだそうです。何かたたくさんのものを表現するとき、「東京ドーム〇個分」が代名詞のようになっていますが、そのいい回しになれてはいけないと思います。本当にあの大きいドーム満杯のゴミが百五十も並ぶことを想像してみてください。そのゴミは簡単には消えません。燃やしても、埋めても、海に流しても、絶対にその悪影響が残ります。

SDGsの目標「6安全な水とトイレを世界中に」「11住み続けられるまちづくりを」「12つくる責任・つかう責任」「13気候変動に具体的な対策を」「14海の豊かさを守ろう」「15陸の豊かさを守ろう」、これらの全ての目標にゴミの問題は関わっています。SDGsの目標は全部で十七個。そのうちの六個に関わっているのですから、これは本当に世界じゅうで取り組んでいかなければならない問題です。ゴミだらけ、ポイ捨てだらけでは海の豊かさも陸の豊かさも守れません。

ん。住み続けられるまちもつくれません。安全な水がなければ生きることできません。だから、ゴミを東京ドームに換算するような量を出さないように、物を作る際や購入する時にはその物が最後にどうなるのかまでを考えるべきなのです。それから、「具体的な対策」は、みんながすぐ簡単に取り組めることとして、私は町内や通勤・通学路のゴミ拾いの習慣化、制度化を提案します。私も実際にゴミ拾いをしてみても、ゴミに対して意識が高くなりました。きれいになると嬉しい、きれいに保っておきたいという気持ちになります。何気なく使ったり通ったりしているところも、自分と同じようにきれいにしてくれている人の存在で成り立っていると思ったら、無責任に汚すこともしなくなるのではないのでしょうか。ゴミの問題は世界の問題ではありませんが、しかしこのように小さな個人の具体的な働きで解決していくべき問題だと、私は思います。

一人一人の努力

富士宮市内中学校

浦田さん

僕が住んでいる柚野は、周りにたくさん山があり、自然が豊かだ。そんな柚野の地域の人たちは、自然を守るためにいろいろな活動をしている。

「暑いー!」

そんなことをずっと言いながら、僕は友達と柚野山の雑草を抜いていた。僕が通っている中学校では、地域の自然のことを調べたり、環境を守る活動をする「柚香」という授業がある。その柚香で、僕たちは柚野山の雑草を抜くことになっていた。そんな時、柚野の自然を守る活動をしている地域の人に出会った。

「とても暑いですね。」

と、言うと、地域の人は、

「そうねー。最近は地球温暖化が進んでいるからね。私たちは、この地球温暖化で柚野の自然が壊れてしまわないようにいろいろな活動をしているのよ。」

と言っていた。この人たちが柚野の豊かな自然を守っているのかと思

うと、地域の人たちがかっこよくみえた。その後学校に帰り、地域の人たちがどんな活動をしているのかを調べてみた。調べた結果、地域の人たちは植樹や柚野山の整備、草刈りやごみ拾いをしていた。さらに調べてみると、「里山整備」という柚野山をきれいにする活動をやっていて、中学生も自由に参加して良いと書いてあった。僕も地域の人たちみたいに柚野の自然を守りたいと思い、この里山整備に参加することにした。

里山整備を行う日、集合場所に行ったら、地域の人たちはとても喜んでくれた。

「中学生が来てくれるなんて嬉しいねー。今日は一緒に頑張ろうねー!」
と言ってくれた。柚野山を登っていくと、雑草が高く伸びていて、落ち葉もたくさん落ちていた。その日は日差しがとても強く、すごい汗が出てきたけど、地域の人たちと楽しく話しながら柚野山をきれいにしていた。そして、地域の人たちに柚野のことについていろいろ質問をした。そしたら、僕が知っている事以外にも、柚野はかなり多くの問題があることが分かった。柚野の問題点を多く知り、さらに柚野の自然を守るための活動を試みたくなった。また、地域の人たちと一緒に柚野山を整備したことで、自分は柚野のために活動をすることができたと思い、嬉しくなった。

後日、昨日柚野のことについて地域の人たちに聞いた時に知った柚野の問題のうちの一つが、ごみ問題だった。地域の人たちによると、用水路や崖の下などの人の目が届きにくいところにごみがボイ捨てされているらしい。それを聞いて、柚野のごみを拾ってあげようと思った。人の目があまり届かなそうな所に行ってみると、使い終わった箸や袋、ペットボトルのキャップなどが落ちていた。自分が見つけたごみは全て拾うことができた。そして、拾ったペットボトルのキャップを使って、キーホルダーを作った。自分で言うのもあんまり良くないけど、かなり柚野の自然のために行動できた。少し大変だったけど、良いことをして気持ちよかった。これからは柚野の自然を守るためにいろんな活動をしていきたいと思えた。また地域の人たちと協力しながらやっていきたい。

昔から柚野に住んでいる祖父に、昔の柚野のことについて聞いてみた。祖父はいろいろなことを教えてくれた。祖父は、「自然は昔の方が多かったな。いろんな環境問題のせいでどんどん自然が壊されてしまっているね。これからは自然を増やしてほしいな。」と言っていた。この話を聞いて、環境を守るだけでなく、自然を増やす活動をするこの大切さが分かった。

地域の人たちは、毎週土曜日の午前中に活動をしている。前まで僕

は部活をやっていたので、なかなか活動に参加することができなかったが、もう部活を引退したのでほぼ毎週参加することができる。だから、これから行ける時はなるべく活動に参加し、地域の人たちと一緒に環境を守る活動と、自然を増やす活動を行い、柚野の豊かな自然を増やしていきたい。

僕たちには地球温暖化などの大きな環境問題を止めることは難しいかもしれない。だけど、自分達が住んでいる地域の自然なら、自分たちの力だけで守り、増やせるかもしれない。だから、日頃から自分たちが住んでいる地域の自然を守る活動をすればよい。そして、その活動を地球のみんながやれば、地球温暖化を止められるかもしれない。だから、みんなが努力して、自分たちが住む地域の自然を守ってほしい。

思いやりの積み重ね

牧之原市内中学校

四ノ宮さん

私はよく、身の周りのいろいろな風景を探しながら散歩をしています。見慣れている風景でも、自然はいつも心を和ませてくれます。この時間は、私にとって癒やしの時間です。

そんな自然の中でも、足元を見ると、ふと、目にとまるものがあります。無造作に投げ捨てられたプラスチック、アルミ缶、空になった食べ物の袋などです。美しい自然の中にゴミがあると、心が痛みます。みんなと生活している環境が人の手によって汚されていくことが、悲しさと疑問を生みます。

私が今、行っていることは、散歩をしながらゴミ拾いをするということです。ゴミ拾いをしながら気付いたことは、ゴミがまだ増え続けているということです。

一方、こんな姿を見かけます。地域の方々の中で、率先して時間を作り、ゴミを拾ってくださっている姿を見かけます。その姿を見ると同じだという共感や、ありがとうという思い、うれしさや感謝の気持ち溢れ出てきます。

しかし、それと同時に、なんでポイ捨てをした人達が拾わないのかという不満や悔しい気持ちが出てきて、その気持ち同士がぶつかり合います。実際にゴミが捨て続けられたら、環境はどうなっていくのでしょうか。

例えば、山に捨てたゴミは、山にいる動物達が、誤飲・誤食をして命を落とすケースは少なくありません。特に、プラスチックは分解されにくく、長い期間環境に残り、草旬物の生態系にも危害を及ぼしてしまうのだそうです。

このように、軽い気持ちでポイ捨てしたゴミは、動物生存を脅かし、植物の形態のバランスが崩れるなどの悪い影響を与えています。ため、この環境問題は、何としても解決しなければなりません。

そこで私は、ゴミを捨てている側の気持ちを知ってほしいと思います。まずは、ポイ捨てをしている人達はどんな気持ちでポイ捨てをしているのかを知ることになりました。インターネットで比較しながら調べた結果、一番多かった意見として、「他のゴミが捨てられているから。」「誰かが清掃してくれるから。」がありました。全体を見ると、マナーやモラルの低さや、罪悪感の薄さが目立ちました。たしかに、悪いことでも、大勢の人がしていると、その流れに乗ってしまうことはよく分かります。しかし、ポイ捨ては人だけでなく動物や環境にも多く

の影響を及ぼすため、そんな軽い気持ちでしていいことではないはずだと私は考えました。

牧之原市の道路愛護運動では、二時間でダンプカー一台分のゴミが集まったという事例を聞きました。これほど大きな行動は、今の私にはできませんが、少しずつゴミを拾いながら歩くことはできます。親に声を掛けました。ゴミの話をして、一緒に散歩し、歩きながらゴミを拾いました。環境のことを考えながら一緒に歩く中で、一つの新しい輪が広がったように感じました。

これからの具体的な取り組みとして、環境を良くしていきたいという自分の気持ちの確認や共有を図るため、地域に尽力されているボランティア活動でいろいろな考え方を学んだり、身近な缶拾いに参加したいと思います。現状を知ることから、新しい取り組みを工夫して見つけていきたいと思います。そして、私もこれからも、気付いてゴミを拾っていくように思います。

美しい環境を守るためには、行動が必要です。地域の方々が、自主的にゴミを拾っている姿から、私が思いやりを感じたように、取り組みを続けることで何かを感じ取ってくれるかもしれません。美しく住みやすい環境づくりは、一人一人が行う、思いやりの積み重ねであり、将来、美しい環境を受け継ぐための取り組みへと繋がっていくのだと

思います。

自ら築きあげていく小さな輪をきっかけに、大きな輪になっていくことを願って、行動し続けていきたいと思います。